

して居る。而して他の一面に於ては近來漸く家庭教育に向つて少しく心を傾くるに至つたは、甚だ喜ぶべき現象であつて、固より一般教育者の考慮すべき問題なれども、特に幼児保育の方法を研究し、其普及發達を目的とする本會の如きは最も直接の關係ある事と思ひます。本會の發達固より遅々たるが如しといへども、會員の數、已に、一千人に垂んとして居ますれば、本會の基礎も漸く、固くなつた事と信ぜられる。切に望む所は、會員諸子、愈て研究努力して本會の任務を盡されん事である。

フレーベル先生の臨終

東 基 吉

冬の終から先生の健康が聊か勝れないといふことであつた。夫にしても先生の事業は格別の障りもなく、先生の意氣は例に由つて盛であつた。明くる年は千八百五十二年で、其四月の二十一日には、先生の第七十回誕生日が非常な盛會に於て祝はれた。同じ月の末、ゴタの教育會から招待せられて、之にも出席したが、この時先生は餘程満足の様子で、先生の意見が、だん／＼教員社會に注意せられる様になつた事を喜んで居られた。

然るに其年の六月六日、先生には遂に最期の病魔の襲撃に出遭はれたのである。先生も今度こそは、到底恢復の望なしと自覺せられた様子であつた。然し、病床に居られる間、喜と平和とは瞬時も先生を

離れない、絶えず微笑を浮べては夫人やお醫者と樂しげに語られて居る。何事も樂し相に見えたが、美しい花を送られた時の喜は又格別であつた。ある時のこと、先生の曰はれるには

「私は花を愛する、人を愛する、子供を愛する、神を愛する、私は總べてを愛する。」

たゞ先生の言葉の上丈けでない、實に先生の容貌の上に最も高い平和が顯はれて居る、最も樂しい辭世が顯はれて居る。先生の精神は如何にも、其理想界に進み行くを喜んで居るかの様に見える。去られる前の日曜日のことであつた。一人の可愛い女の子が先生にといつて一束の花を持つて來た時、先生は非常な喜で迎へて、叶はぬ手を無理にさしのべて、其子を引きよせ、その小さな手を自身の唇に當てられたのであつた。先生の花に對する心遣は次の言葉でも分る

どうか私の花を氣を付けて下さい、草も頼む、私が之から學び得た所は實に多いのである

と曰はれた。そして今はの時にも同じことをくり返された。窓は時々開けて置く様にとのことで、そして、外の自然の様を見られた時は、先生の顔は一入さえ渡つた、そしてこんなことを仰せられる

「ア、何と清らかな生々とした自然でないか

時には又

「いつまでも我に親愛なれ、我は死ぬるのでない、之から後も汝の中に逍遙するのである」

そして、カイルハウで先生と一所に働かれた友達等に對しては、どうか一致と調和と平和とを保つて行

く様に、模範的の生活を送る様に、一家族と同じく一致の骨折をする様にと、再三再四訓誡せられ周囲の人々には、先生の事業に同情を表せられた事に對して、重ね々感謝の意を顯はされた。

かゝる間に、此月の二十一日は來た、病床に付かれてかれこれ二週間目の夕刻、この日は容體が殊更危く居らせられた。一杯の葡萄酒をとのことで唇を濕はされたが、臨終はこの時から漸く追つた。うつらうつらと閉ぢられた兩眼は、かすかに開かれて、親友ミツデンドルフの顔を今一度眺めたと思ふと、呼吸が漸く忙はしくなつて、其夕の七時頃、二度許り長い呼吸をせられた儘、先生の眼は永遠に閉ぢられたのである。

一生の間片時も一身の利益に思ひ到らず、全力を人道と幼子の幸福との爲に犠牲にせられたこの尊むべき偉人の臨終は、げに些の惱も悶もなく、この様に平和で安靜であつた。

この時側は侍つた先生の親友の一人は、沈痛の語調で次の様にいはれた。

「先生の靈魂は、平和と愛と感謝とを以て、例令ば、幼子の父母の膝下に歸る様に、其原に歸られた。夕日の西に沈む景色は先生が常に愛せられた所で、清らけき夏の夕暮の空は、度々我を忘れて眺められたのであつたが、先生の臨終は、丁度夕日の西に沈んだ様なものだ。先生の存在の光は恰も太陽の様に、普く我等の上を照された。今や夕日の西山に沈んだ様に、先生の光も我等の眼から離れた。然も再び我等の間に歸らるゝ事は尙太陽の每朝東の空に顯はるゝが如きものと私は信ずる。永久の生命を信じて、

私は、悲歎の中にも喜を感じる。今は死も歎さず私から消え去つた。自然界とあれ程親まれた我が先生、自然の教を聞き、一つの眞を以て自然の法則に従はれた先生は今や愛兒の様に自然の懷に抱かれた。自然は確に先生の愛に報ひるであらう。病床に在られた間の先生の静かさは丁度小羊の様であつた。一言半句の苦痛の聲も不平の訴へも聞かれなかつた。先生は、實に忠實な自然の子であつた、そして自然は實に、慈愛の母であつた。かくて今や自然は其懷に先生を取り去つたのである。

言ひ終つて、此人は熱心な祈禱を捧げた。

さて葬儀の日となつた。さまざまの花はいやが上にも先生の棺を飾つて居る。夫人と生徒との手に由つて出来た月桂冠は病床に弔されて居る。人々は今一度先生の面影を拜せんと周圍に集つた。聊かの苦痛の痕跡も面影には留めて居ない。清き熱心と内心の喜と非常な柔和とは變り果てた姿の上にも明に顯はれて居る。唇は幽かに開かれて居て其様子は例令ば未來の世の秘密を語られて居るかとも思はれる。言ひ知れぬ神々しさと清けさとは廣くもない此一室にうち渡つた。此瞬間に於ける先生の無言の説教は人々の心を打つて無限の感動を與へた。やがて棺は廣場に移された。數知れぬ幼子等の捧げた花束の影しいこと。此日集つた者は之等の幼子の他に教師といはれ保母といはるゝ人々を始め其他知るも知らぬも、遠近の別なく、何れも此壯嚴の式に列せんとて參集した。かくて讚美歌の合唱と共に葬式はシユワイナ村の寺院に向け徐かに行進を始めたのである。

折節、雨は車軸の如く風さへ加はつて凄しい天氣となつた。この時葬儀を司どる牧師リユツケルトは、  
 牧師に似つかはしい謹嚴の句調で

「先生は最後の旅行すら尙嵐の中を通られるのである」といはれた。

寺院に着いてから牧師は更に會葬者の前に立つて、述べられた一節は次の如くであつた。

「一生の務を成し遂げて安らげく眠に就かれた靈魂は茲に横はつて居る。先生は幼子と人道の爲に全身を捧げられた。大いなる希望をもたれたが今や其希望は充たされたのである

かくて讚美と祈禱との間に棺は墓に下された。折柄雲散つて空晴れ、太陽は、隈なく墓内を照らし始めた、人々は更に夥しき花束を投げ込んだ。同時に寺院の鐘は無量の感慨を興へるべく響き渡り、近く前面に屹立せるリーベンスタインの古城もさながら、此偉人の長逝を痛むかの様に、暮れ行く春の霞に其半身を隠した。